

脳と、こころと、ヘソの下



黒川 清 (東京大学名誉教授、政策研究大学院大学名誉教授、東海大学特別荣誉教授)

1936年生まれ。東京大学医学部卒業。1969年に渡米、1979年UCLA内科教授。1983年帰国後、東京大学医学部教授、東海大学医学部長、日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議員、内閣特別顧問、WHOコミッショナー、国会福島原発事故調査委員会委員長などを歴任。国際科学者連合体、国内外の学会および大学の理事、役員など幅広い分野で活躍。紫綬褒章、レジオンドヌール勲章シュバリエ、旭日重光章を受章。著書に『世界級キャリアのつくり方』(共著、東洋経済新報社)、『大学病院革命』(日経BP社)、『イノベーション思考法』(PHP新書)、『規制の虜——グループシンクが日本を滅ぼす』(講談社)ほか多数。

KUROKAWA Kiyoshi

The first duty of a university is to teach wisdom, not trade; character, not technicalities.

Winston Churchill

地球生物は周りの環境変化に対して、個として、家族として、群れとして、それぞれが感覚器、皮膚、手足などで外界の変化を認識し、脳が判断し、声、言葉、身体などを使って反応、対応しながら生活する。ヒトは地球生物の最上位にあって脳を中心に外からの多彩なインプットに、目、耳、鼻、皮膚、手足と身体全体などを使って「本能」に加えて、このインプットを複雑なプロセスを使って解析、対応できる「種」へと進化してきた。これらの中心は「脳と神経系」だ。

最近、私は講演の機会に演題を「脳と、こころと、へその下」とすることがある。確かにヒトの「脳」は地球上の動物種の中でもっとも進化したが、最近では「シンギュラリティ」(Ray Kurzweil)という、近いうちにコンピューターが「全人類の脳機能」を超えるという予測もある。確かに、将棋ばかりでなく「碁」でさえも日中韓の名人もコンピューター「Alpha Go」に勝てなくなった。

では人間の「こころ」はどうか？ これは「実体験」から脳にインプットされる「無意識ともいえる記憶」による価値観ではないか。「まっさらな脳」で母親の中にいるときに始まり、生まれてからの個人の生活史からくる「常識、価値観、社会観、宗教」など、

両親と家族、学校、友達や先生、失敗や仕事などからの「記憶、性格」、あるいは「好み、価値観」、そして「人柄、いい人、頑固」などの背景だろう。それらが合わさって日常的に「YesかNo」を「決める」判断をしてきたのだ。これが「へその下」、つまりは「ガッツ」、「へそ曲がり」、「従順」などの「性格、お人柄」へと育っていく。ネットで広がる「グローバル世界」では、私たちの常識とは何か？ これらの違いが世界のあちこちの不安定要素の背景にある。人間は多くを知るようになった。だが「知識」は増えたが決して「賢く」はなっていない。そういう「弱点」を認識する「謙虚さ」が問われ始めているのではないか？ 一方で「西欧的民主制度」から新しいパラダイムへの数世紀ぶりの大変化、これがグローバル世界の背景にある大きな課題なのだろう。つまりは「知識」から「知恵」へ、「Book Smart」から「Street Smart」(実体験)の時代へ」と言えるような大変化なのだ。では「教育」、そして「大学」という高等教育の目的、目標は何なのか、これが大学人に課せられた責任ではあるまいか？

昔からの賢人の言葉、ことわざは文明を超えた人間の英知^{かたまり}の塊だ。「失敗は成功のもと」。今のような「グローバル」情報世界では隠してもバレる可能性は大きい。今の時代、どんな組織でも透明性は信頼の根幹なのだ、それは失敗から学ぶ組織文化であり、組織の姿勢なのだ。